

勤務医部会だより

救命救急センターを設置している病院の 医師の働き方改革



幹事 河野 弘
(名古屋掖済会病院病院長)

私の勤めている名古屋掖済会病院は公益社団法人日本海員掖済会に属する。当法人は1879年(明治13年)に、我が国海運の振興を図るため、海員に対する福利厚生を目的として前島 密により掖済(腋に手を添えて、導きたすける)という理念で設立された。そして1887年(明治20年)に日本初の公益社団法人として認可され現在、本部を東京に置き、全国、港を中心に8つの病院を運営している。名古屋掖済会病院は8つの掖済会病院の中では7番目として1948年(昭和23年)に開設された。名古屋市南西部の基幹病院として602床の急性期病院であるが、救命救急センターは1978年(昭和53年)に東海地区で最初に開設され、「救急の最後の砦」として24時間断らない医療を信条としている。

この救命救急センターの機能維持に問題となったのが医師の働き方改革である。当院の時間外診療体制は、救命救急センターに内科系医師1名、外科系医師1名、救急科医師1名、初期研修医は2学年で計4名、合計7名の医師を配置している。一方、本館には内科系医師1名、外科系医師1名、ICU担当1名、小児科1名、産婦人科1名の計5名を配置している。さらに緊急性の高い診療科として、外科、整形外科、心臓血管外科、脳神経外科、麻酔科、循環器内科、消化器内科、脳神経内科の8つの診療科は待機を敷いている。勤務時間は、救命救急センター夜勤勤務者は翌朝8時20分まで、本館夜勤勤務者は翌朝12時までとしている。そして時間外労働の基準は多くの医療機関と同様で、自己研鑽とみなされる活動以外はほとんど時間外労働として扱っている。

当院は急性期病院であるため、1日平均44名の入院者数があるが、内時間外入院者は平均14名である。救命救急センターの受診者数は1ヶ月平均2,700名であるが、内80%は時間外受診である。また、救

急車受入台数は1日平均30台で、内70%以上は時間外である。令和4年4月の所属常勤医師は初期研修医36名を含め計193名である。その内男性135名、女性68名で男女比は約2対1である。医師数の多い診療科は、救急科17名、外科16名、麻酔科14名、整形外科13名、循環器内科12名、消化器内科12名、小児科11名、産婦人科10名と確保できているが、救急対応が必要な脳神経外科は6名、そして心臓血管外科は3名と医師不足になっている。また、救急と関係がある救急科、小児科、産婦人科を含め11の診療科をみると、3つの診療科では女性が半数以上であるが、残りの8つの診療科では男性が主である。子育て中の女性医師は時間外対応が難しく、主に男性医師で緊急対応に当たっている。手術件数は月平均470件であるが、このうち緊急手術は22%の90件程度である。心臓カテーテル件数は月に110から120件で、そのうち緊急は平均20件である。このような緊急対応から時間外が月45時間を超える医師は約40名となる。時間外人数の多い順として、救急科、循環器内科、脳神経外科、整形外科、心臓血管外科となるが、脳神経外科や心臓血管外科では季節によっては100時間超えの医師も複数あり危機的となっている。医師数が確保されている診療科では、特定の医師に負担が集中した場合は労働を他の医師で補完することが可能であるため、主任部長は配慮して当番制を考える。しかし、医師数の限られた脳神経外科や心臓血管外科では補完が難しい。特に心臓血管外科では緊急手術は年間60件程度で、3名の常勤医は基本的に手術に入ることが多い。もちろん季節性もあるため、年間一律ではない。また、脳神経外科では緊急手術は年間250件と多いが、手術に入る医師は基本2名でよいと心臓血管外科よりは分散しやすい。幸い脳神経外科では2021年から初期研修医が2名の後期研修医が加わったため、以前よりは偏りが減少した。

以上まとめると、救命救急センターは24時間稼働で、様々な疾患の患者対応が必要とされる。特に緊急を要する疾患では、多くの専門領域では医師の確保が必要となる。なかでも医師数の限られた診療科では負担の分担が困難となる。当然病院として大学医局への応援要請をおこなっているが、現状はまだ厳しく、当面は自院の初期研修医から後期研修医として不足している診療科への誘導を行っているのが現状の対応である。